

ロドリゴ・カロ「イタリカの遺跡に捧げるカンシオン」 —翻訳と注釈—

中井 博康

Rodrigo Caro's *Canción a las ruinas de Itálica*: A Translation with Explanatory Notes.

NAKAI Hiroyasu

Rodrigo Caro (1573-1647) was an Andalusian priest, historian, archaeologist and lawyer, whose fame as a poet comes from the *Canción a las ruinas de Itálica* [*Ode to the Ruins of Itálica*]. In this poem about the ruins of a Roman city near Seville, Caro revives and relives Roman antiquity and laments time's inexorable effects on human achievements. This is a translation with explanatory notes of the well known 3rd version of the ode, based on the critical edition of Caro's poetry by Pascual Barea (2000).

はじめに

古跡を材に栄枯盛衰をうたう詩は、スペイン黄金世紀文学においても独自の位置を占めているが、López Bueno (pp.82-97) によれば、『廷臣論』で名高いイタリアの文人・外交官カスティリオーネ Baldassare Castiglione (1478-1529) がローマの遺跡に捧げたソネット (《Superbi colli, e voi sacre ruine》) を範として、セビーリャ出身の詩人セティーナ Gutierre de Cetina (1520-1557) がカルタゴの遺跡に捧げたソネット (《Excelso monte do el romano estrago》) をその嚆矢とする。その後、セビーリャ派の中心人物だった学匠詩人エレーラ Fernando de Herrera (1534-1597) が、セビーリャ近郊にあるイタリカの遺跡を材にソネット (《Esta rota y cansada pesadumbre》) を創作するとともに、上述のカスティリオーネとセティーナのソネットを、1580年に出版されたガルシラーソ Garcilaso de la Vega (1503-1536) の註釈付き作品集 (*Obras de*

Garci Lasso de la Vega con anotaciones de Fernando de Herrera...) に収録した結果、この主題は特にセビーリャにおいて一世を風靡することとなった。なかでもメドラノ Francisco de Medrano (1570-1607) のソネット (《Estos de pan llevar campos ahora》)、アルギホ Juan de Arguijo (1567-1622) のソネット (《Esta, a la rubia Ceres consagrada》)、リオハ Francisco de Rioja (1583-1659) のソネット (《Estas ya de la edad canas ruinas》) などはよく知られているが、いわゆる ubi sunt? (彼らは何処) あるいは tempus fugit (時は逃げ去る) といった主題の扱われ方は、否定的なものもあれば肯定的なものもあり、恋愛詩もあれば道徳詩もあるなど、実に多様であった。そして、スペイン語詩における同主題の代表作とされるのが、聖職者としての務めの傍ら膨大な考古学的・歴史学的な著作を残したロドリゴ・カロ Rodrigo Caro (1573-1647) の「イタリカの遺跡に捧げるカンシオン」である¹。

ちなみにイタリカとは、スペイン南部アンダルシア州のセビーリャ市北西(現サンティポンセ)にあった古代都市遺跡であり、第二次ポエニ戦争でハンニバル率いるカルタゴ軍を破った大スキピオによって前3世紀に建設された。ローマ軍がカルタゴ最後の拠点ガディル(現カディス)を下し、イベリア半島南部の制圧を果たすのは、ひとえにイタリカという足場を得たからであった。4万人収容の円形劇場のほか浴場や広場など大規模な公共建築物を備え、五賢帝のトラヤヌスやハドリアヌスなど数多くの人材を輩出したイタリカは、グアダルキビル川の対岸に建設されたヒスパリス(現セビーリャ)と繁栄を競ったが、5世紀に入ると衰退を迎え、異民族との戦乱を通じてすっかり荒廃して、後世のセビーリャの詩人たちの詩想をそそった。

カロの「イタリカの遺跡に捧げるカンシオン」は、詩人が同遺跡を訪れた1595年に執筆が始まる。その後も推敲が重ねられ、最終的には5種類の版が存在するが、最も有名な第3版(1618-1619)を翻訳・註釈することにし、Joaquín Pascual Barea による校訂版 (*Rodrigo Caro: Poesía castellana y latina e inscripciones originales*, Diputación de Sevilla, 2000) を底本とした。なお、原文は各連17行(11音節6行+7音節3行+11音節8行)とする全6連

1 例えばキューバの詩人ニコラス・ギリエン Nicolás Guillén (1902-1989) は、ソネット「ニューヨークの遺跡に」(《A las ruinas de Nueva York》)においてカロの「カンシオン…」を換骨奪胎し、荒廃した米国最大の都市の様子を、いわゆるプロレプシス(prolepsis)の手法で予見的に描いている。

から構成されているが、訳出にあたっては押韻や音節数を反映することは諦めて行数のみ原文に従うにとどめ、七五調や擬古的な表現も極力廃して、読みやすさを優先した。

翻訳と注釈

「イタリカの遺跡に捧げるカンシオン」

[1]

いたましいかな² ファビオ³
 この寥々たる野は 寂寂たる丘は⁴
 名にし負うイタリカだったところ
 ここは スキピオ⁵の
 常勝無敗の植民市⁶だったところ
 おそろべき驚異の市壁も

-
- 2 いたましいかな：原文は〈jay dolor!〉。プロペルティウスの詩集第一巻第二十歌（Prop. 1, 20, 30: ah dolor!）にも見られる表現（CARO, p.137）。「ああ悲しい」（中山訳, p.209）。
- 3 ファビオ：原文は〈Fabio〉。ファビオという人名は、「賢人 sabio」と音が類似するとともに、古代ローマの政治家ファビウス（Quintus Fabius Maximus；スペイン語では Fabio Máximo）が第二次ポエニ戦争で敵の消耗を待つ作戦によって勝利を収めるものの、ハンニバルとの対戦を避けたため無知な民衆からは侮蔑を浴びたという故事により、セビーリャの道徳詩においては、衆愚を超越したストア哲学者を象徴していた（CARO, p.137）。
- 4 寥々たる野は…：原文は〈campos de soledad〉。「かつて都市があった荒野」というモチーフは、例えばウェルギリウス『アエネーイス』第三歌（*Aen.* 3, 11: campos ubi Troia fuit）にみられる（CARO, p.137）。「かつてトロイアが立っていた平野」（岡・高橋訳, p.222）。これとは反対に「かつて荒野だったところの都市」というモチーフは、例えばプロペルティウスの詩集第四巻第一歌（Prop. 4, 1, 1-2: hoc, quodcumque uides, hospes, qua maxima Roma est, / ante Phrygem Aenean collis et herba fuit;）にみられる（CARO, p.137）。「客人よ、あなたをご覧のこのすべて、最大のローマが今ある所は、／プリュギア人のアエネーアースの以前には、丘と草だったのだ」（中山訳, p.376）。なお、カロが参考にしたメドラノのソネット（vv.1-2）とは酷似している（Estos de pan llevar campos ahora / fueron un tiempo Itálica [...]）。
- 5 スキピオ：原文は〈Cipión〉。古代ローマの将軍（前236-前184）。第二次ポエニ戦争で名将ハンニバル率いるカルタゴ軍を破り、イベリア半島におけるローマの支配を確立した。イタリカは、その過程で建設された都市。

- 崩折れて地に落ち
あわれな遺跡でしかない
あの勝ち誇れる人々も
10 辺りを払ったその影も
残るはただ墓碑のみ
ここにあった広場も あそこの神殿も⁷
残るはわずかな痕跡ばかり
競技場も 心地よい浴場も⁸
灰塵となり 宙を舞うのみ
風をものともしなかった塔も
自重に耐えず 自ら潰えた⁹

[2]

- 異教の神々の誇りだった
この不埒な劇場も
20 カキネガラシ¹⁰の黄色い花が
その不遜の末路を世に伝え
いまや崩れて 悲劇の舞台となり
過去の栄光と現在の無惨を
時の寓話を 上演している

-
- 6 常勝無敗の植民市：原文は〈la vencedora colonia〉。メドラノ（v.4）では「その常勝無敗の祖国（su patria vencedora）」となっている。
- 7 ここにあった広場も…：原文は〈Este llano fue plaza; allí fue templo;〉。Medrano（vv.2-3）では「この野には神殿があった（este llano / fue templo）」となっている。
- 8 競技場も 心地よい浴場も：「競技場 gimnasio」は、エクセドラ（会合用に座席を備えた半円形の空間）を持つことから「エクセドラの家 la casa de Exedra」と呼ばれている遺構を、「浴場 termas」は新市街の「モーロ王妃の浴場 Baños de la reina mora」を指すとされる（CARO, p.141）。
- 9 風をものともせぬ塔も…：風を歯牙にも掛けない塔および自重に耐えず倒壊する塔というモチーフは、それぞれウェルギリウスの『アエネーイス』第三歌第七七行（contemnere ventos）および第九歌第五四〇行（pondere turre / procubuit）に由来するとされる（CARO, p.141）。「風をものともせぬようにした」（岡・高橋訳, p.104）、「その重みで櫓が／突如として倒れた」（同, p.425）。
- 10 カキネガラシ：原文は〈jaramago〉。アブラナ科の一種。荒地に多く見られ、死や破壊を象徴する黄色の花をつけるため、廃墟や遺跡の詩的イメージとされた（CARO, p.142）。

- なぜ 闘技場に ひとけがなく
 荒漠として喚声がとどろいていないのか？
 畜生がいるのに¹¹ 裸の剣闘士¹²は どこにいるのか？
 屈強な競技者たちは どこにいるのか？
 すべては消え去った¹³
- 30 運命の女神が 歓声を静寂に変えてしまった
 しかし時間は この残骸の上で
 残酷な見世物をなおもさらす
 目は 眼前の光景に錯乱し
 魂は 悲痛な声に動揺する

[3]

- あの雷のごとき勇将¹⁴は ここで生まれた
 祖国の偉大なる父 スペインの誉れ
 慈悲深く 幸いなる 覇者トラヤヌス¹⁵
 太陽の揺籠を眺める地から
 カデイスの海がひれ伏して洗う地まで
- 40 陛下を前に 黙してひざまづく
 ここは アエリウス・ハドリアヌス¹⁶が
 神聖なるテオドシウス¹⁷が

-
- 11 畜生がいるのに…：「畜生 fieras」は、遺跡に生息するトカゲ類や、囲い場として利用されていた円形劇場跡の家畜を指すとされる（CARO, p.145）。
 12 裸の剣闘士：原文では〈el desnudo luchador〉。メドラノ（vv.7-8）では「この闘技場では剣闘士が拍手喝采を待っていた（en este cerco el luchador profano / del aplauso esperó la voz sonora）」のように言及されている。
 13 すべては消え去った：原文は〈Todo desapareció〉。メドラノ（v.9）には「すべてが消え去るとは！（¡Cómo feneció todo!）」という表現がみられる。
 14 あの雷のごとき勇将…：原文は〈aquel rayo de la guerra〉。ウェルギリウスが二人のスキピオに冠した『アエネーイス』第六歌第八四二行（Belli fulmen）の表現に由来するとされる（CARO, p.150）。「戦場の二つの雷電」（岡・高橋訳, p.291）。
 15 トラヤヌス：原文は〈Trajano〉。古代ローマ皇帝（在位98-117）で五賢帝の一人。積極的な対外政策により帝国の版図を最大とした。植民市イタリカで出生したため「属州初の皇帝」とされる。メドラノ（v.3-4）では「ここにはテオドシウスの、あそこにはトラヤヌスの彫像が建てられた（aquí a Teodosio, allí a Trajano / puso estatuas）」のように言及されている。

- たぐいまれなるシリウス¹⁸が
象牙と黄金の揺籠に揺られたところ
時には月桂樹を 時にはジャスミンを
戴いたところ しかし その庭園も
今では 木苺の茂る水溜まり
カエサルのために建造された邸宅も
トカゲの住処となり果てた
50 邸宅も 庭園も 皇帝も 世を去り
事績をたたえた石碑も土に帰った¹⁹

[4]

ファビオよ 泣いていないのなら
見たまえ 潰れた街道を
見たまえ 崩れた大理石やアーチを
見たまえ 尊大不遜の彫像が
復讐の女神²⁰に打ち倒され 横たえているのを
彫刻された偉人たちもまた
深い安らぎ²¹に葬られているのを

-
- 16 アエリウス・ハドリアヌス：原文は〈Elio Adriano〉。古代ローマ皇帝（在位117-138）で五賢帝の一人。トラヤヌス帝と同じく、イタリアで出生したとされる。
- 17 神聖なるテオドシウス：原文は〈Teodosio divino〉。古代ローマ皇帝（在位379-395）。帝国を再統一し、キリスト教を国教化した。ヒスパニア出身ではあるが、出生地はイタリアではなく、カウカ（現コカ）。
- 18 シリウス：原文は〈Silio〉。ローマ帝政期の政治家・詩人（28-103）のシリウス・イタリクス（Silius Italicus；スペイン語ではSilio Itálico）は、イタリアの現バドヴァで生まれたとされるが、正確な出生地は分かっていない。作者カロは、イタリア出身だと考えていたようだが、これは誤りだとされる（CARO, p.148）。
- 19 石碑も…：原文は〈piedras〉。石もまた死を迎えるという発想は、アウソニウスによる墓銘（*Epi.* 32, 9-10: *monumenta fatiscunt; / mors etiam saxis nominibusque venit*）から拝借したとされる（CARO, p.152）。〈His monuments decay, and death comes even to his marbles and his names.〉（AUSONIUS, p.159）。イタリアの遺跡をうたった数多くのソネットでは、石材は時間に対する勝利を表象しているのに対し、カロの哀歌では敗残の遺物として描かれている（CARO, p.152）。
- 20 復讐の女神：原文は〈Némesis〉。ネメシスとは、人間の思い上がりに対する神の怒りと罰を擬人化した、ギリシャ神話の女神。

私は想う　かくあったろうと
 60 トロヤも　その由緒ある市壁も
 神々と王たちの祖国にして
 今や名のみ残るローマ²²も
 ミネルヴァの手になる賢きアテネ²³も
 正義の法も　役には立たなかった
 昨日まで時の流れに抗っていたのに
 今では灰塵となり　孤独が広がる²⁴
 どれほど賢く　どれほど強くとも
 運命を　死を　免れはしなかった

[5]

しかし　嘆く理由を新たに求め
 70 心を涙にするまでもない
 手近な例を　目の前を見れば十分
 いまだここには　黒煙が　火炎が見える
 慟哭が　呻吟が　今なお聞こえる
 ここに住む者たちは
 地霊²⁵あるいは守護神にうながされ

-
- 21 深い安らぎ：原文は〈alto silencio〉。『アエネーイス』(Aen. 6.522: alta quies) を踏まえた表現 (CARO, p.154)。「快く深い安らぎ」(岡・高橋訳, p.272)。
- 22 名のみ残るローマ：原文は〈Roma, a quien queda el nombre apenas〉。プロペルティウスの詩集第四卷第一歌 (4, 1, 37: nil patrium nisi nomen habet Romanus alumnus) を踏まえた表現とされる (CARO, p.154)。「ローマの子孫は祖先から　名前だけしか承け継いでいない」(中山訳, p.378)。
- 23 ミネルヴァの手になる賢きアテネ：原文は〈fábrica de Minerva, sabia Atenas〉。ギリシャ神話の知恵・芸術・工芸をつかさどる女神アテナ（ローマ神話のミネルヴァ）が、アッティカ地方の領有をめぐる海神ポセイドン（ローマ神話のネプトゥン）と争った際、ポセイドンが塩水の泉を住民に贈ったのに対し、アテナはオリーブの樹を贈って勝利を収めたため、首府はアテナイ（現アテネ）と呼ばれるようになったとする起源神話を踏まえた表現。
- 24 孤独が広がる…：原文では〈vastas soledades〉。リーウィウス『ローマ建国史』（1.4.6: vastae tum in his locis solitudines erant）に同様の表現が見られるが、ただし栄枯盛衰が逆転している (CARO, p.154)。「当時、この辺りは荒涼として人気がなかった」(鈴木訳, p.22)。

感慨深く こう語る
静かな夜に 聞こえてきたと
悲しげな声が 泣きながら
「イタリカは廃れり」とこぼすのを

- 80 鬱蒼とした森の中 悲痛な声でエコが
「イタリカ」と繰り返すのを
森が「イタリカ」と響き返すのを
イタリカの高き名を耳にして
幾千もの英霊たちが
広大な廃墟の半ばで 悲しみを新たに
庶民ですら これほど悲しむとは！

[6]

- 名にしおうイタリカよ この短い哀歌を
弔問のしるしとして
おまえの尊霊たち²⁶に捧げよう
90 (灰燼は情を持たぬ²⁷というが
その悲しい由緒も わたしは承知している
もし この涙の供物を受けてくれるのなら)
わが落涙に報いて
イタリカの司教にして殉教者の
聖ヘロンシオ²⁸の遺骸を見せておくれ
その墓の痕跡を教えておくれ

25 地霊：原文は〈genio〉。古代ローマの精霊信仰におけるゲニウス・ロキ (genius loci) のことで、ここではイタリカという土地の守護精霊を指す。イタリカにはゲニウスを祀る神殿があったとされ、トガを着たゲニウス像を刻むメダルが残っている (CARO, p.156)

26 尊霊たち：原文は〈manes〉。古代ローマにおいてマネスと呼称される、敬愛する故人の靈魂のこと。

27 灰燼は情を持たぬ：原文は〈las cenizas ingratas〉。『アエネーイス』第六歌 (*Aen.* 6, 212: cineri ingrato) を踏まえた表現とされる (CARO, p.159)。「無情な灰」(岡・高橋訳, p.254)。

28 聖ヘロンシオ：原文では〈Geroncio〉。イタリカの初代司教を務め、殉教したとされる聖人 (CARO, p.158)。

- その貴い石棺を 岩が隠しているならば
涙で発掘してみせよう²⁹
とはいえ 厳正なる天が奪ったものならば
100 慰めを求めるべくもない
むしろ 天も地も羨むほどに
麗しい遺骸を 遺跡の誉れとするがよい

参考文献

- CARO, Rodrigo, *Poesía castellana y latina e inscripciones originales*, estudio, edición crítica, traducción, notas e índices de Joaquín Pascual Barea, Diputación de Sevilla, 2000.
- ARGUIJO, Juan de, *Poesía completa*, edición de Oriol Miró Martí, Cátedra, 2009.
- AUSONIUS, *Ausonius: in two volumes, I*, with an English translation by Hugh G. Evelyn White, William Heinemann; Harvard University Press, 1961.
- CETINA, Gutierre de, *Sonetos y madrigales completos*, edición de Begoña López Bueno, Cátedra, 1990.
- GÓMEZ Canseco, Luis, *Rodrigo Caro: un humanista en la Sevilla del seiscientos*, 1986.
- GUILLÉN, Nicolás, *Summa poética*, edición de Luis Íñigo Madrigal, Cátedra, 1997.
- HERRERA, Fernando de, *Poesía castellana original completa*, edición de Cristóbal Cuevas, Cátedra, 1997.
- LÓPEZ BUENO, Begoña, «Tópica literaria y realización textual: unas notas sobre la poesía española de las ruinas en el Siglo de Oro», *Templada lira: 5 estudios sobre poesía del Siglo de Oro*, Editorial Don Quijote, 1990, pp.75-97.
- MEDRANO, Francisco de, *Poesía*, edición de Dámaso Alonso, coordinada por María Luisa Cerrón, Cátedra, 1988.
- RIOJA, Francisco de, *Poesía*, edición de Begoña López Bueno, Cátedra, 1984.
- TOMÉ, Eustaquio, *La Canción a las ruinas de Itálica y la Epístola moral*, Claudio García, 1944.
- ウェルギリウス『アエネーイス』岡道男・高橋宏幸訳 京都大学学術出版会 2001年。
オウィディウス『悲しみの歌：黒海からの手紙』木村健治訳 京都大学学術出版会 1998年。
プロペルティウス「プロペルティウス詩集」『ローマ恋愛詩人集』中山恒夫編訳 国文社 1985年。
リーウィウス『ローマ建国史』鈴木一州訳 上 岩波書店 2007年。

29 涙で発掘…：原文は〈cavaré con lágrimas las peñas〉。カロ自身による遺跡の発掘調査を反映するとともに、オウィディウス『黒海からの手紙』第四卷第十歌（*Pont.* 4, 10, 5: gutta cavat lapidem）を踏まえた表現とされる（CARO, p.160）。「水滴は石を穿ち」（木村訳, p.429）。

